## (19) 日本国特許庁(JP) (12) 特許公報(B2)

(11) 特許番号

(24) 登録日 平成28年11月25日 (2016.11.25)

## 特許第6044926号

(P6044926)

(45) 発行日 平成28年12月14日 (2016. 12. 14)

(51) Int.Cl.			FI		
G06F	17/50	(2006.01)	GO6F	17/50	666Y
HO1L	21/82	(2006.01)	GO6F	17/50	658J
			HO1L	21/82	Т

請求項の数 3 (全 19 頁)

(21) 出願番号 (22) 出願日 (65) 公開番号 (43) 公開日	特願2012-196681 (P2012-196681) 平成24年9月6日 (2012.9.6) 特開2014-52832 (P2014-52832A) 平成26年3月20日 (2014-3-20)	(73)特許権者	皆 504229284 国立大学法人弘前大学 青森県弘前市文京町1番地 100108272
審査譜求日	平成27年4月6日 (2015 4 6)		4·100100372 4·理十 谷田 拓男
		(72)発明者	笹川 和彦
特許法第30条第2	2.項適用 日本機械学会東北学生会第		青森県弘前市文京町1番地 国立大学法人
42回卒業研究発表	長講演会、社団法人日本機械学会主催		弘前大学内
、平成24年3月6	3日開催		
		審査官	合田 幸裕
			最終頁に続く

(54) 【発明の名称】ビア接続の多層配線の信頼性を評価する信頼性評価シミュレーションプログラム、ビア接続の多 層配線の許容電流密度向上方法およびビア接続の多層配線

(57)【特許請求の範囲】

【請求項1】

リザーバ構造を有するビア接続の多層配線について、エレクトロマイグレーション損傷 過程におけるビア接続の多層配線の信頼性を評価する信頼性評価シミュレーションプログ ラムであって、コンピュータに、

前記多層配線を二次元的に要素分割する要素分割ステップ、

前記要素分割ステップで分割された各要素の初期原子濃度を N ₀とする初期設定ステップ、

2次元有限要素法により前記多層配線内の電流密度分布及び温度分布を計算する2次元 有限要素法ステップ、

10

前記2次元有限要素法ステップにより計算された前記多層配線内の電流密度分布及び温度分布と記録部に記録された該多層配線材料の物性定数とに基づき、単位時間に単位体積 当たりエレクトロマイグレーションにより何個原子が消失するかを示す以下の支配パラメ ータ(陰極および陽極端の要素とビアとではAFD<sup>\*</sup>genjend、他の要素ではAF D<sup>\*</sup>gen)、 【数 1 】

$$AFD_{\text{gen}}^{*} = \frac{1}{4\pi} \int_{0}^{2\pi} \left( AFD_{gb\theta}^{*} + \left| AFD_{gb\theta}^{*} \right| \right) d\theta \tag{3}$$

【数 2 】

$$\begin{aligned} AFD_{gb\theta}^{*} &= C_{gb}^{*} N \frac{4}{\sqrt{3}d^{2}} \frac{1}{T} \exp\left\{-\frac{\mathcal{Q}_{gb} + \kappa\Omega(N - N_{T})/N_{0} - \sigma_{T}\Omega}{kT}\right\} \times \\ &\left\langle \sqrt{3}\Delta\varphi \left\{ \left(j_{x}\cos\theta + j_{y}\sin\theta\right) Z^{*}e\rho - \frac{\kappa\Omega}{N_{0}} \left(\frac{\partial N}{\partial x}\cos\theta + \frac{\partial N}{\partial y}\sin\theta\right) \right\} \right. \\ &\left. - \frac{d}{2}\Delta\varphi \left\{ \left(\frac{\partial j_{x}}{\partial x} - \frac{\partial j_{y}}{\partial y}\right) Z^{*}e\rho\cos2\theta - \frac{\kappa\Omega}{N_{0}} \left(\frac{\partial^{2}N}{\partial x^{2}}\cos\theta + \frac{\partial^{2}N}{\partial y^{2}}\sin\theta\right)\cos2\theta \right. \\ &\left. + \left(\frac{\partial j_{x}}{\partial y} + \frac{\partial j_{y}}{\partial x}\right) Z^{*}e\rho\sin2\theta - 2\frac{\kappa\Omega}{N_{0}}\frac{\partial^{2}N}{\partial x\partial y}\sin2\theta \right\} \\ &\left. - \frac{\sqrt{3}}{4}d\frac{\kappa\Omega}{N_{0}} \left(\frac{\partial^{2}N}{\partial x^{2}} + \frac{\partial^{2}N}{\partial y^{2}}\right) - \frac{\kappa\Omega/N_{0}}{kT} \\ &\left. \times \left[\frac{\sqrt{3}}{4}d\left\{Z^{*}e\rho\left(j_{x}\frac{\partial N}{\partial x} + j_{y}\frac{\partial N}{\partial y}\right) - \frac{\kappa\Omega}{N_{0}} \left(\frac{\partial N}{\partial x}\frac{\partial N}{\partial x} + \frac{\partial N}{\partial y}\frac{\partial N}{\partial y}\right)\right\} \right] \\ &\left. - \frac{d}{2}\Delta\varphi \left\{Z^{*}e\rho\left(j_{x}\frac{\partial N}{\partial y} + j_{y}\frac{\partial N}{\partial x}\right) - 2\frac{\kappa\Omega}{N_{0}}\frac{\partial N}{\partial x}\frac{\partial N}{\partial y}\right\}\sin2\theta \right] \\ &\left. + \frac{\sqrt{3}d}{4T} \left\{\frac{\mathcal{Q}_{gb} + \kappa\Omega(N - N_{T})/N_{0} - \sigma_{T}\Omega}{kT} - 1\right\} \\ &\left. \times \left\{Z^{*}e\rho\left(j_{x}\frac{\partial N}{\partial y} + j_{y}\frac{\partial N}{\partial x}\right) - \frac{\kappa\Omega}{N_{0}} \left(\frac{\partial N}{\partial x}\frac{\partial N}{\partial x} + \frac{\partial N}{\partial y}\frac{\partial N}{\partial y}\right)\right\} \right\}, \end{aligned}$$
(2)

ここで、N:原子濃度、D₀:振動数項、k:ボルツマン定数、T:絶対温度、Q₅ь :原子拡散の活性化エネルギ、 :保護膜拘束下の濃度変化と応力変化との間の係数、 :原子体積、 T:引張の熱応力、N⊤: Tが作用したときの原子濃度、N₀:無応力 状態における原子濃度、Z<sup>\*</sup>:有効電荷数、e:単位電荷、 :電気抵抗率、j<sup>\*</sup>:電流 密度ベクトルのJ方向の成分、 N / 1:原子濃度勾配のJ方向成分、 :結晶粒界の 有効幅、 :微小単位構造と×軸との間の角度、d:平均結晶粒径、 :結晶粒界間の 角度に関する定数、Q₅ь:粒界拡散の活性化エネルギ、D×=Z<sup>\*</sup>e j×- /N ₀( N / x)、Dy=Z<sup>\*</sup>e jy- N₀( N / y)であり、 【数3】

 $AFD_{gen}^{*}|_{end}$ 

$$= \frac{2}{\sqrt{3\pi d^2}} \frac{C_{gb}^* N}{T} \exp\left(-\frac{Q_{gb} + \kappa \Omega (N - N_T) / N_0 - \sigma_T \Omega}{kT}\right)$$

$$\left[ 6D_x \sin\beta - 6D_y \cos\beta + \frac{\sqrt{3}}{4} \pi d \left\{ -\frac{\kappa \Omega}{N_0} \left(\frac{\partial^2 N}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 N}{\partial y^2}\right) - \frac{\kappa \Omega / N_0}{kT} \left(D_x \frac{\partial N}{\partial x} + D_y \frac{\partial N}{\partial y}\right) + \frac{1}{T} \left(\frac{Q_{gb} + \kappa \Omega (N - N_T) / N_0 - \sigma_T \Omega}{kT} - 1\right) \left(D_x \frac{\partial T}{\partial x} + D_y \frac{\partial T}{\partial y}\right) \right\} \right]$$
(4)

ここで、 :配線端が×軸となす角度、d:平均結晶粒径、D×=Z<sup>\*</sup>e j×-/N₀( N / x)、Dy=Z<sup>\*</sup>e jy- N₀( N / y)、 を計算する支配パラメータ計算ステップ、

前記支配パラメータ計算ステップで計算された支配パラメータの値に基づき、 に関する原子濃度 N<sup>\*</sup>、ここで、 N<sup>\*</sup>:式 2 で表される A F D<sup>\*</sup>g b に含まれる を 0 から 2

のそれぞれの値としてAFD<sup>\*</sup>g♭ 値を計算し、その値から求める の値毎の原子濃 度、を計算する原子濃度N<sup>\*</sup>計算ステップ、

前記原子濃度N<sup>\*</sup>計算ステップで計算された の値毎に持っている原子濃度N<sup>\*</sup>を要素 内の全てについて平均した原子濃度Nを計算する原子濃度N計算ステップ、

原子濃度が変化しなくなる定常状態に達したか否かを判断する判断ステップ、 前記判断ステップで定常状態に達していないと判断された場合、繰返し計算のための設 定を行って、前記支配パラメータ計算ステップへ戻って計算を繰返す繰返ステップを実行 させるためのビア接続の多層配線の信頼性を評価する信頼性評価シミュレーションプログ ラム。

【請求項2】

リザーバ構造を有するビア接続の多層配線について、<u>請求項1記載の信頼性評価シミュ</u>30 レーションプログラムの実行結果から得られた、定常状態における配線内の原子濃度の最 小値がボイド形成に至る臨界の原子濃度の値に一致する際の入力電流密度(閾電流密度) の評価に基づき陰極端のビア側にのみリザーバを設け、該多層配線内部の最小原子濃度を 増加させることにより、多層配線の許容電流密度を増加させることを特徴とするビア接続 の多層配線の許容電流密度向上方法。

【請求項3】

リザーバ構造を有するビア接続の多層配線構造において、<u>請求項1記載の信頼性評価シミュレーションプログラムの実行結果から得られた、定常状態における配線内の原子濃度</u>の最小値がボイド形成に至る臨界の原子濃度の値に一致する際の入力電流密度(閾電流密度)の評価に基づき陰極端のビア側にのみリザーバを設け、該多層配線内部の最小原子濃度を増加させることにより、多層配線の許容電流密度を増加させることを特徴とするビア 接続の多層配線構造。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

[0001]

本発明は、リザーバ構造を有するビア接続の多層配線について、エレクトロマイグレー ション損傷過程におけるビア接続の多層配線の信頼性を評価する信頼性評価シミュレーシ ョンプログラム等に関する。

【背景技術】

[0002]

40

近年、電子デバイスの高集積化によって、金属配線の微細化が進んでいる。一方、微細化された配線においては高密度電流およびそれに伴うジュール熱の上昇に起因して、エレクトロマイグレーション(Electromigration: EM)による損傷が問題となっている。 EMとは、高密度電子流による金属原子の拡散現象である。

【 0 0 0 3 】

図9は、リザーバ構造を有する多層配線50を示す。図9に示されるように、ビア接続 56を有する多層配線50において、配線端部54n(陰極側-)および54p(陽極側 +)から外側へ張り出し部(リザーバ)55nおよび55pを設けることにより、リザー バ効果によってEM損傷による断線を遅延させることが知られている(非特許文献1参照 )。この効果は、張り出し部(リザーバ)55nおよび55pから供給される金属原子が 金属配線51、52および53への原子のリザーバとなるためである。 【0004】

一方、ビア接続ではEM損傷の閾電流密度j thが存在することが知られている。従来 、 閾電流密度j thの評価方法の研究が行われてきた(非特許文献 2 参照)。 閾電流密度 j th は数値シミュレーションによっても評価され、配線における原子濃度分布の生成プ ロセスがシミュレーションされている。このシミュレーションは、多結晶構造配線におけ るEM損傷の支配パラメータAFD<sup>\*</sup>genに基づく(非特許文献 3 参照)。このパラメ ータは 2 次元配線形状へ適用可能であり、種々の評価が行われている(非特許文献 4 参照 )。リザーバ効果を考慮したEM損傷評価シミュレーションの開発も試みられてきた(非 特許文献 5 および 6 参照)。

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【 0 0 0 5 】

上述した非特許文献3~6のシミュレーションでは、ボイドが発生、成長し断線に至る EM損傷過程のシミュレーションには至っておらず、リザーバ効果を考慮しつつ配線の信 頼性を評価可能なシミュレーション手法は未だに開発されていないという問題があった。 そこで、本発明の目的は上記問題を解決するためになされたものであり、リザーバ構造を 有するビア接続の多層配線について、ボイドの発生に至るEM損傷過程のシミュレーショ ンを実施し、リザーバ効果を考慮しつつ閾電流密度を評価することにより多層配線の信頼 性を評価する信頼性評価シミュレーションプログラム等を提供することにある。 【課題を解決するための手段】

[0006]

この発明のビア接続の多層配線の信頼性を評価する信頼性評価シミュレーションプログ ラムは、リザーバ構造を有するビア接続の多層配線について、エレクトロマイグレーショ ン損傷過程における多層配線の信頼性を評価する信頼性評価シミュレーションプログラム であって、コンピュータに、前記多層配線を二次元的に要素分割する要素分割ステップ、 前記要素分割ステップで分割された各要素の初期原子濃度をN。とする初期設定ステップ 、2次元有限要素法により前記多層配線内の電流密度分布及び温度分布を計算する2次元 有限要素法ステップ、前記2次元有限要素法ステップにより計算された前記多層配線内の 電流密度分布及び温度分布と記録部に記録された該多層配線材料の物性定数とに基づき、 単位時間に単位体積当たりエレクトロマイグレーションにより何個原子が消失するかを示 す以下の支配パラメータ(陰極および陽極端の要素とビアとではAFD<sup>\*</sup>genjend 、他の要素ではAFD<sup>\*</sup>gen</sup>)、

[0007]

40

30

10

50

【数1】

$$AFD_{gen}^{*} = \frac{1}{4\pi} \int_{0}^{2\pi} \left( AFD_{gb\theta}^{*} + \left| AFD_{gb\theta}^{*} \right| \right) d\theta \qquad (3)$$

$$I \stackrel{(0)}{=} \stackrel{(0)}{=} \stackrel{(0)}{=} \stackrel{(0)}{=} N \frac{4}{\sqrt{3}d^2} \frac{1}{T} \exp\left\{-\frac{Q_{gb} + \kappa\Omega(N - N_T)/N_0 - \sigma_T\Omega}{kT}\right\} \times \left\{\sqrt{3}\Delta\varphi\left\{\left(j_x\cos\theta + j_y\sin\theta\right)Z^*e\rho - \frac{\kappa\Omega}{N_0}\left(\frac{\partial N}{\partial x}\cos\theta + \frac{\partial N}{\partial y}\sin\theta\right)\right\} - \frac{d}{2}\Delta\varphi\left\{\left(\frac{\partial j_x}{\partial x} - \frac{\partial j_y}{\partial y}\right)Z^*e\rho\cos2\theta - \frac{\kappa\Omega}{N_0}\left(\frac{\partial^2 N}{\partial x^2}\cos\theta + \frac{\partial^2 N}{\partial y^2}\sin\theta\right)\cos2\theta + \left(\frac{\partial j_x}{\partial y} + \frac{\partial j_y}{\partial x}\right)Z^*e\rho\sin2\theta - 2\frac{\kappa\Omega}{N_0}\frac{\partial^2 N}{\partial x\partial y}\sin2\theta\right\} - \frac{\sqrt{3}}{4}\frac{d}{N_0}\left(\frac{\partial^2 N}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 N}{\partial y^2}\right) - \frac{\kappa\Omega/N_0}{kT} \times \left[\frac{\sqrt{3}}{4}d\left\{Z^*e\rho\left(j_x\frac{\partial N}{\partial x} + j_y\frac{\partial N}{\partial y}\right) - \frac{\kappa\Omega}{N_0}\left(\frac{\partial N}{\partial x}\frac{\partial N}{\partial x} + \frac{\partial N}{\partial y}\frac{\partial N}{\partial y}\right)\right\} - \frac{d}{2}\Delta\varphi\left\{Z^*e\rho\left(j_x\frac{\partial N}{\partial y} + j_y\frac{\partial N}{\partial x}\right) - 2\frac{\kappa\Omega}{N_0}\frac{\partial N}{\partial x}\frac{\partial N}{\partial y}\right\}\sin2\theta\right] + \frac{\sqrt{3}d}{4T}\left\{\frac{Q_{gb} + \kappa\Omega(N - N_T)/N_0 - \sigma_T\Omega}{kT} - 1\right\} \times \left\{Z^*e\rho\left(j_x\frac{\partial N}{\partial y} + j_y\frac{\partial N}{\partial x}\right) - \frac{\kappa\Omega}{N_0}\left(\frac{\partial N}{\partial x}\frac{\partial N}{\partial x} + \frac{\partial N}{\partial y}\frac{\partial N}{\partial y}\right)\right\}\right\}, (2)$$

【0009】

ここで、N:原子濃度、D₀:振動数項、k:ボルツマン定数、T:絶対温度、Q₅ь :原子拡散の活性化エネルギ、 :保護膜拘束下の濃度変化と応力変化との間の係数、 :原子体積、 T:引張の熱応力、N⊤: Tが作用したときの原子濃度、N₀:無応力 状態における原子濃度、Z<sup>\*</sup>:有効電荷数、e:単位電荷、 :電気抵抗率、j<sup>\*</sup>:電流 密度ベクトルのJ方向の成分、 N / 1:原子濃度勾配のJ方向成分、 :結晶粒界の 有効幅、 :微小単位構造と×軸との間の角度、d:平均結晶粒径、 :結晶粒界間の 角度に関する定数、Q₅ь:粒界拡散の活性化エネルギ、D×=Z<sup>\*</sup>e j×- /N ₀( N / ×)、Dy=Z<sup>\*</sup>e jy- N₀( N / y)であり、  $\begin{bmatrix} 0 & 0 & 1 & 0 \end{bmatrix}$   $\begin{bmatrix} \Delta FD_{gen}^{*} |_{end} \\ = \frac{2}{\sqrt{3\pi d^{2}}} \frac{C_{gb}^{*} N}{T} \exp\left(-\frac{Q_{gb} + \kappa \Omega (N - N_{T}) / N_{0} - \sigma_{T} \Omega}{kT}\right)$   $\begin{bmatrix} 6D_{x} \sin \beta - 6D_{y} \cos \beta \\ + \frac{\sqrt{3}}{4} \pi d \left\{ -\frac{\kappa \Omega}{N_{0}} \left(\frac{\partial^{2} N}{\partial x^{2}} + \frac{\partial^{2} N}{\partial y^{2}}\right) - \frac{\kappa \Omega / N_{0}}{kT} \left(D_{x} \frac{\partial N}{\partial x} + D_{y} \frac{\partial N}{\partial y}\right) \\ + \frac{1}{T} \left(\frac{Q_{gb} + \kappa \Omega (N - N_{T}) / N_{0} - \sigma_{T} \Omega}{kT} - 1\right) \left(D_{x} \frac{\partial T}{\partial x} + D_{y} \frac{\partial T}{\partial y}\right) \right\}$  (4)

## 【0011】

ここで、 :配線端が×軸となす角度、d:平均結晶粒径、D×= Z<sup>\*</sup>e j×-/N°( N/ ×)、Dy=Z<sup>\*</sup>e jy- N°( N/ y)、を計算する支配 パラメータ計算ステップ、前記支配パラメータ計算ステップで計算された支配パラメータ の値に基づき、 に関する原子濃度N<sup>\*</sup>、ここで、N<sup>\*</sup>:式2で表されるAFD<sup>\*</sup>gb に含まれる を0から2 のそれぞれの値としてAFD<sup>\*</sup>gb</sub>値を計算し、その値から 求める の値毎の原子濃度、を計算する原子濃度N<sup>\*</sup>計算ステップ、前記原子濃度N<sup>\*</sup>計 算ステップで計算された の値毎に持っている原子濃度N<sup>\*</sup>を要素内の全てについて平均 した原子濃度Nを計算する原子濃度N計算ステップ、 N/ ×、 N/ y等、濃度分 布の計算ステップ、原子濃度が変化しなくなる定常状態に達したか否かを判断する判断ス テップ、前記判断ステップで定常状態に達していないと判断された場合、繰返し計算のた めの設定を行って、前記支配パラメータ計算ステップへ戻って計算を繰返す繰返ステップ を実行させるための多層配線の信頼性を評価する信頼性評価シミュレーションプログラム である。

[0012]

この発明のビア接続の多層配線の許容電流密度向上方法は、リザーバ構造を有するビア 接続の多層配線について、<u>本発明の信頼性評価シミュレーションプログラムの実行結果から得られた、定常状態における配線内の原子濃度の最小値がボイド形成に至る臨界の原子</u> 濃度の値に一致する際の入力電流密度(閾電流密度)の評価に基づき陰極端のビア側にの みリザーバを設け、該多層配線内部の最小原子濃度を増加させることにより、多層配線の 許容電流密度を増加させることを特徴とする。

[0013]

この発明のビア接続の多層配線構造は、リザーバ構造を有するビア接続の多層配線構造 において、<u>本発明の信頼性評価シミュレーションプログラムの実行結果から得られた、定</u> <u>常状態における配線内の原子濃度の最小値がボイド形成に至る臨界の原子濃度の値に一致</u> <u>する際の入力電流密度(閾電流密度)の評価に基づき</u>陰極端のビア側にのみリザーバを設 け、該多層配線内部の最小原子濃度を増加させることにより、多層配線の許容電流密度を 増加させることを特徴とする。

【発明の効果】

[0014]

本発明では、 E M 損傷支配パラメータを用いた本数値シミュレーションを実施すること により、集積回路配線におけるリザーバ効果の評価を行った。本数値シミュレーションは 、まず電流密度分布および温度分布を 2 次元 F E 分析(有限要素法による分析。一般的に は数値解析としてもよい。)により計算する。上記解析結果(電流密度分布および温度分 30

20

布)とディスク等に記録された薄膜特性(配線材料の物性定数)とから各要素における上 記支配パラメータ(AFD<sup>\*</sup>genlend、AFD<sup>\*</sup>gen)を計算する。次に、 に 関する原子濃度N<sup>\*</sup>を上記支配パラメータの値に基づき計算する。各要素における原子濃 度Nはすべての の値についてのN<sup>\*</sup>の平均により計算する。 N/ x、 N/ y等 、濃度分布の計算を行い、臨界原子濃度または原子濃度が変化しなくなる定常状態に達し たか否かを判断し、達したと判断した場合は終了し、そうでないと判断した場合は、上記 支配パラメータの計算を繰返す。

【0015】

本数値シミュレーションにより、陰極端側にリザーバを設けると、配線内部の最小原子 濃度が増加し、配線の許容電流密度が増加することがわかった。また、リザーバを有する<sup>10</sup> 配線に許容値以上の電流が作用した場合、陰極側のビア部で原子濃度はボイド発生の臨界 値に到達するため、ボイド発生箇所は陰極側のビア部であると評価できた。即ち、許容値 以上の電流が作用した場合、陰極側のビア部にボイドが発生することが実験事実と符合し ていることがわかったため、本数値シミュレーションによる結果は妥当であると言える。 つまり、従来あまり行われない陰極端側のみにリザーバを設けることを行うと、配線の許 容電流密度が増加し、損傷しにくくなることがわかった。以上により、リザーバ構造を有 するビア接続の多層配線について、ボイドの発生に至るEM損傷過程の本数値シミュレー ションを実施し、リザーバ効果を考慮しつつ閾(許容)電流密度を評価することにより配

20

【図面の簡単な説明】

【0016】

【図1】多結晶構造のモデルを示す図である。

【図2】本数値シミュレーションまたは方法の流れを示すフローチャートである。

【図3】繰返し計算による配線の原子濃度分布の時間に伴う変化をグラフで示す図である 。

【図4】本数値シミュレーションで評価した4種類の配線構造を示す図である。

【図 5】定常状態でのすべての要素における原子濃度 N<sup>\*</sup>の最小値と想定した電流密度 j との関係をグラフで示す図である。

【図6】サンプル1、2および3の配線に沿った原子濃度N/N₀の分布をグラフで示す 30 図である。

【図7】本数値シミュレーション終了時の原子濃度分布をグラフで示す図である

【図8】本発明のシミュレーションプログラムを実行するコンピュータの内部回路30を 示すブロック図である。

【図9】リザーバ構造を有する多層配線50を示す図である。

【発明を実施するための形態】

[0017]

本発明では、リザーバを有する配線の信頼性評価法を開発するための第一段階として、 ボイド発生に至る許容電流密度の評価と許容値以上の電流を作用させたときのボイド発生 箇所の評価とを行うためのEM損傷の本発明の数値シミュレーションプログラム(または 40 数値シミュレーション方法。以下、単に「本数値シミュレーション」と言う。)方法を開 発した。以下、各実施例について図面を参照して詳細に説明する。

【実施例1】

【0018】

本数値シミュレーションプログラムを構築するために、EM損傷の支配パラメータAF D<sup>\*</sup>genが用いられる(非特許文献3参照)。当該パラメータはEM損傷に起因する原 子流束の定式化で与えられる。原子濃度勾配(応力勾配)に起因するバックフローと拡散 率における金属配線内で生成された応力の効果とを考慮したEM原子流束Jは式1で与え られる(非特許文献7参照)。

【0019】

【数4】

$$\left|\mathbf{J}\right| = \frac{ND_0}{kT} \exp\left\{-\frac{Q_{gb} + \kappa \Omega (N - N_T)/N_0 - \sigma_T \Omega}{kT}\right\} \left(Z^* e\rho j^* - \frac{\kappa \Omega}{N_0} \frac{\partial N}{\partial l}\right) \quad (1)$$

[0020]

ここで、N:原子濃度、D₀:振動数項、k:ボルツマン定数、T:絶対温度、Q₅ь :原子拡散の活性化エネルギ、 :保護膜拘束下の濃度変化と応力変化との間の係数、 :原子体積、 T:引張の熱応力、N⊤: Tが作用したときの原子濃度、N₀:無応力 状態における原子濃度、Z<sup>\*</sup>:有効電荷数、e:単位電荷、 :電気抵抗率、j<sup>\*</sup>:電流 密度ベクトルのJ方向の成分、 N / 1:原子濃度勾配のJ方向成分である。 【0021】

本数値シミュレーションでは保護層で覆われた広いCu配線を想定したため、結晶粒界 拡散(grain boundary diffusion)を主要な拡散メカニズムとして仮定した。非特許文献 8、9によれば広いCu配線(interconnetcs)において、結晶粒界はEM経路(path) となる。発明者らは原子流束発散を計算するモデルを導入した(非特許文献10参照)。 そこで、発明者はCu配線に関しても当該モデルに基づいてEM損傷の支配パラメータを 用いた。

[0022]

微小単位構造(後述)に出入りする原子を考慮すると、多結晶構造配線の原子流束発散 は式2で与えられるように定式化される。

【0023】

20

40

【数5】

$$\begin{aligned} \mathcal{A}FD_{gb\theta}^{*} &= C_{gb}^{*}N\frac{4}{\sqrt{3}d^{2}}\frac{1}{T}\exp\left\{-\frac{\mathcal{Q}_{gb}+\kappa\Omega(N-N_{T})/N_{0}-\sigma_{T}\Omega}{kT}\right\}\times\\ &\left\langle\sqrt{3}\Delta\phi\left\{\left(j_{x}\cos\theta+j_{y}\sin\theta\right)Z^{*}e\rho-\frac{\kappa\Omega}{N_{0}}\left(\frac{\partial N}{\partial x}\cos\theta+\frac{\partial N}{\partial y}\sin\theta\right)\right\}\right.\\ &-\frac{d}{2}\Delta\phi\left\{\left(\frac{\partial j_{x}}{\partial x}-\frac{\partial j_{y}}{\partial y}\right)Z^{*}e\rho\cos2\theta-\frac{\kappa\Omega}{N_{0}}\left(\frac{\partial^{2}N}{\partial x^{2}}\cos\theta+\frac{\partial^{2}N}{\partial y^{2}}\sin\theta\right)\cos2\theta\right.\\ &\left.+\left(\frac{\partial j_{x}}{\partial y}+\frac{\partial j_{y}}{\partial x}\right)Z^{*}e\rho\sin2\theta-2\frac{\kappa\Omega}{N_{0}}\frac{\partial^{2}N}{\partial x\partial y}\sin2\theta\right\}\\ &-\frac{\sqrt{3}}{4}d\frac{\kappa\Omega}{N_{0}}\left(\frac{\partial^{2}N}{\partial x^{2}}+\frac{\partial^{2}N}{\partial y^{2}}\right)-\frac{\kappa\Omega/N_{0}}{kT}\\ &\times\left[\frac{\sqrt{3}}{4}d\left\{Z^{*}e\rho\left(j_{x}\frac{\partial N}{\partial x}+j_{y}\frac{\partial N}{\partial y}\right)-\frac{\kappa\Omega}{N_{0}}\left(\frac{\partial N}{\partial x}\frac{\partial N}{\partial x}+\frac{\partial N}{\partial y}\frac{\partial N}{\partial y}\right)\right\}\\ &-\frac{d}{2}\Delta\phi\left\{Z^{*}e\rho\left(j_{x}\frac{\partial N}{\partial y}+j_{y}\frac{\partial N}{\partial x}\right)-2\frac{\kappa\Omega}{N_{0}}\frac{\partial N}{\partial x}\frac{\partial N}{\partial y}\frac{\partial N}{\partial y}\right\}\sin2\theta\right]\\ &+\frac{\sqrt{3}d}{4T}\left\{\frac{\mathcal{Q}_{gb}+\kappa\Omega(N-N_{T})/N_{0}-\sigma_{T}\Omega}{kT}-1\right\}\\ &\times\left\{Z^{*}e\rho\left(j_{x}\frac{\partial N}{\partial y}+j_{y}\frac{\partial N}{\partial x}\right)-\frac{\kappa\Omega}{N_{0}}\left(\frac{\partial N}{\partial x}\frac{\partial N}{\partial x}+\frac{\partial N}{\partial y}\frac{\partial N}{\partial y}\right)\right\}\right\rangle, \tag{2}$$

【0024】

ここで、C<sup>\*</sup>gbはDo / kを表しており、結晶粒界の有効幅を で示す。dは平均 結晶サイズ、 は結晶粒界間の相対角度に関連した定数、j×およびjyはデカルト座 標系における電流密度ベクトルjの×、y成分、 は微小単位構造と×軸との間の角度で ある。図1(A)は多結晶構造のモデルを示し、図1(B)は図1(A)の一部拡大図( 微小単位構造)を示す。図1(A)中では金属配線(Metal line)10の一部拡大図が示 されており、当該拡大図において金属結晶粒12はサイズdの矩形(6角形のGrain)で 表されている。図1(B)に示される微小単位構造では結晶粒界(Grain Boundary)1( アラビア数字)、2(アラビア数字)および3(アラビア数字)、微小単位構造と×軸と の間の角度 、定数 等が示されている。

【 0 0 2 5 】

式 2 の A F D<sup>\*</sup>genの正の値のみの期待値が E M 損傷を支配するパラメータ A F D<sup>\*</sup> genを表し、多結晶構造配線におけるボイド形成に関して式 3 が得られる。 【 0 0 2 6 】 【数6】

$$AFD_{gen}^{*} = \frac{1}{4\pi} \int_{0}^{2\pi} \left( AFD_{gb\theta}^{*} + \left| AFD_{gb\theta}^{*} \right| \right) d\theta \qquad (3)$$

[0027]

式3は単位時間、単位体積当たりで減少する原子数を意味する。

【0028】

配線端部では、原子流に関する境界条件を上記パラメータの形成に与える必要がある。 つまり、配線の陰極端では原子の流入はなく陽極端では原子の流出はないからである。当 該境界条件は、可能なゼロ流束を図1(B)に示される微小単位構造内に各 範囲につい て割当てることにより表すことができる。表1は原子流束に関する上記境界条件を示す( 非特許文献11参照)。表1中のJ<sub>1(アラビア数字)</sub>、J<sub>2(アラビア数字)</sub>、J<sub>3(</sub>

アラビア数字)等の1(アラビア数字)、2(アラビア数字)および3(アラビア数字) は図1の結晶粒界(Grain Boundary)1(アラビア数字)、2(アラビア数字)および3 (アラビア数字)の1(アラビア数字)、2(アラビア数字)および3(アラビア数字) である。

【0029】

【表1】

Range - I	Range -II	Range -III
$-2\pi/3 + \Delta \varphi + \beta < \theta \le -\pi/3 - \Delta \varphi + \beta$	$-\pi/3 - \Delta \varphi + \beta < \theta \leq \beta$	$\beta < \theta \le \pi/3 + \Delta \varphi + \beta$
J1=J11=0	J <sub>II</sub> =0	$J_1 = J_1 = 0$
Range -IV	Range - V	Rage - VI
$\pi/3 + \Delta \varphi + \beta < \theta \le 2\pi/3 - \Delta \varphi + \beta$	$2\pi/3-\Delta \varphi+\beta < \theta \leq \pi+\beta$	$\pi + \beta \le \theta \le 4\pi/3 + \Delta \varphi + \beta$
J=0	J=J_=0	Ju=0

[0030]

以上より、図1(B)に示される微小単位構造内の原子の出入りを考慮すると、ビア接 続配線端部における原子流束発散AFD<sup>\*</sup>gen」milは式4により与えられる。 【0031】 10

【数7】

 $AFD_{gen}^{*}|_{end}$ 

$$= \frac{2}{\sqrt{3}\pi d^{2}} \frac{C_{gb}^{*} N}{T} \exp\left(-\frac{Q_{gb} + \kappa \Omega (N - N_{T}) / N_{0} - \sigma_{T} \Omega}{kT}\right)$$

$$\left[ 6D_{x} \sin \beta - 6D_{y} \cos \beta + \frac{\sqrt{3}}{4} \pi d \left\{ -\frac{\kappa \Omega}{N_{0}} \left(\frac{\partial^{2} N}{\partial x^{2}} + \frac{\partial^{2} N}{\partial y^{2}}\right) - \frac{\kappa \Omega / N_{0}}{kT} \left(D_{x} \frac{\partial N}{\partial x} + D_{y} \frac{\partial N}{\partial y}\right) + \frac{1}{T} \left(\frac{Q_{gb} + \kappa \Omega (N - N_{T}) / N_{0} - \sigma_{T} \Omega}{kT} - 1\right) \left(D_{x} \frac{\partial T}{\partial x} + D_{y} \frac{\partial T}{\partial y}\right) \right\} \right]$$

$$(4)$$

【0032】

ここで、 :結晶粒界の有効幅、 :配線端が×軸となす角度(図1(B)参照)、d
 :平均結晶粒径、Q<sub>gb</sub>:粒界拡散の活性化エネルギ、D×=Z<sup>\*</sup>e j×- /N₀
 (N/x)、Dy=Z<sup>\*</sup>e jy- N₀(N/y)である。原子流束勾配A
 FD<sup>\*</sup><sub>genlend</sub>は結晶粒界における流束発散の量を表し、単位時間、単位体積当たりで減少する原子数を意味する。

【 0 0 3 3 】

上記 E M 損傷の支配パラメータを用いて、配線内における原子濃度分布の本数値シミュ レーションを数種類の入力電流密度 j、基板温度 T。を条件として実行した。評価される 配線は二次元的に要素分割し、原子濃度分布の生成プロセスは上記支配パラメータに基づ き各要素の原子濃度を変化させながらシミュレートした。温度に関する境界条件は配線の 両端に与え、電流密度に関する境界条件はビア位置に与えた。原子流は金属配線の周囲で は遮断した。端部のパラメータである A F D<sup>\*</sup>genjendは陰極および陽極端の要素 とビアとで用い、A F D<sup>\*</sup>gen</sub>は他の要素で用いた。

【0034】

図2は、本数値シミュレーションまたは方法の流れをフローチャートで示す。図2に示 30 されるように、要素の初期原子濃度をN₀とする。まず、電流密度分布および温度分布を 2次元 FE分析(有限要素法。一般的には数値解析としてもよい。)により計算する(ス テップS10)。上記分析結果(電流密度分布および温度分布)とディスク38(後述) 等に記録された薄膜特性(配線材料の物性定数。非特許文献4参照)とから各要素におけ る上記支配パラメータ(AFD<sup>\*</sup>genlend、AFD<sup>\*</sup>gen)を計算する(ステッ プS12、S14)。時間経過に伴い配線内の原子濃度分布は変化し、これら支配パラメ ータ値も変化する。次に、 に関する原子濃度N<sup>\*</sup>を上記支配パラメータの値に基づき計 算する。各要素における原子濃度Nはすべての の値についてのN<sup>^</sup>の平均により計算す る。 N / X、 N / y 等の濃度分布の計算も行う(以上、ステップS16)。臨界 原子濃度または原子濃度が変化しなくなる定常状態に達したか否かを判断し(ステップS 40 18)、達したと判断した場合は終了し、そうでないと判断した場合はステップS14へ 戻って計算を繰返す。繰り返すときは、ステップS16の結果の、N、 N/ ×、 Ν / yを使って、ステップS14の計算を行う。

【0035】

本数値シミュレーションでは各要素に2種類の原子濃度(N<sup>\*</sup>、N)を使っている。 つは、式2で表されるAFD<sup>\*</sup>gb</sub> に含まれる (図1参照)を0から2 のそれぞれ の値としてAFD<sup>\*</sup>gb</sub> 値を計算し、その値から求める原子濃度(N<sup>\*</sup>)である。よっ て、N<sup>\*</sup>は の値毎に計算される。もう一つは、 の値毎に持っているN<sup>\*</sup>を要素内の全 てについて平均した原子濃度Nである。このNが要素の原子濃度として、式2で用いられ ている。原子濃度の初期値N<sup>0</sup>からEM損傷前の要素内の原子数がわかる。AFD<sup>\*</sup>ge

nまたはAFD<sup>\*</sup>genjendは、単位時間に単位体積当たりEMにより何個原子が消 失するかを求めるパラメータであるから、この値から1計算ステップの間にどのくらい要 素から原子が消失するかを計算することができ、時間経過後の要素の原子濃度Nを求める ことができる。要素の原子濃度N(とその勾配 N/ x、 N/ y等も)が変化する と、それらの関数であるAFD<sup>\*</sup>genまたはAFD<sup>\*</sup>genlendの値も変化する。 これによる時間ステップを進行させた繰り返し計算を行う。繰り返し計算はある入力電流 密度を仮定して行う。

[0036]

図3は、繰返し計算による配線の原子濃度分布の時間に伴う変化をグラフで示す。図3 で横軸は配線中央部(図4参照)からの距離(μm。負が陰極側で正が陽極側)、縦軸は 原子濃度(N/N₀)である。原図では繰返し数(step。時間の経過)が色分けされて示 されている(青色:5000ステップ、赤色:10,000ステップ、緑色:20,00 0 ステップ、紫色: 3 0 , 0 0 0 ステップ)。図 3 に示されるように、繰返し数が多くな るほど(時間の経過に伴い)、同じ位置における原子濃度は変化していき、十分に時間が 経過すると原子濃度が変化しなくなる定常状態になることがわかる。図3に示されるよう に、時間経過に伴い、要素毎のN<sup>\*、</sup>さらにはNが変化していき、その後濃度分布が定常 状態になる。

[0037]

図4は、本数値シミュレーションで評価した4種類の配線構造を示す。図4で図9と同 じ符号を付した個所は同じ要素を示すため、説明は省略する。図4(A)は両端にリザー 20 バがないサンプル1を示し、図4(B)は陰極ビアにリザーバを配置したサンプル2を示 し、図4(C)は陽極ビアにリザーバを配置したサンプル3を示し、図4(D)は陰極ビ アおよび陽極ビアの両方にリザーバを配置したサンプル4を示す。図4(A)~(D)に 示すような直線形状のCu配線を想定し、リザーバの有無が閾電流密度の大きさに与える 影響を評価した。図4(A)~(D)に示すように、リザーバがない場合(サンプル1) 、陽極端から密度|の電流を入力し、陰極端から|の電流を出力する(矢印参照)。両端 に想定したビア間の距離は150(µm)、配線52の幅Wは10(µm)、厚さtは4 10(nm)である。リザーバがある場合(サンプル2および3)も同様に150(μm )離れたビア間で密度 j の電流を入出力した。張り出し部 5 5 n 、 5 5 P の長さはいずれ も25(µm)である。本数値シミュレーションは各々のサンプルにおいて、基板温度5 73(K)下で、3種類の電流密度を想定して実施した。

30

10

本数値シミュレーションにおいて、Cu配線は表2で示される特性定数を有するものと 想定した(非特許文献12~16参照)。 【 0 0 3 9 】

【表2】

Characteristic constants	Value	Reference
$D_0$ [ $\mu$ m <sup>2</sup> /s]	3.35	[8]
$Q_{gb}[eV]$	1.1	[9]
$\Omega_{[\mu m^3]}$	3.00×10 <sup>11</sup>	
<i>Z</i> *	1	[10]
$P_0$ [Ωµm]	0.0345 at 573[K]	
α <sub>[K-1]</sub>	0.0043 at 573[K]	[11]
к [GPa]	42.5	
$N^*_{min}$ [µm <sup>-3</sup> ]	8.40×10 <sup>10</sup>	[12] Cited from results for Al interconnect
$N^*_{max}$ [ $\mu$ m <sup>-3</sup> ]	8.56×10 <sup>10</sup>	[12]
<i>d</i> [µm]	0.8	

(13)

[0040]

入力電流密度は、0.2、0.4および0.6(MA/cm<sup>2</sup>)の3つの値を想定した。 環境温度はすべてのサンプル1~4において573(K)と想定した。

【0041】

想定した電流密度が小さい場合は、配線内の原子濃度N<sup>\*</sup>の最小値がボイド形成に至る 臨界の原子濃度N゙ուոに達することなく配線内の原子濃度分布が変化しなくなる定常 状態となる。配線内における原子濃度の最小値がちょうどN^ոュոに一致する電流密度 を閾電流密度とし、配線の許容電流密度として評価する。閾電流密度より小さい電流密度 で本数値シミュレーションを実行後、原子濃度分布の定常状態を得た。図5(A)は、定 常状態でのすべての要素における原子濃度 N<sup>\*</sup>の最小値と想定した電流密度 j との関係を 示すグラフである。図5(A)で横軸は電流密度(MA/cm<sup>2</sup>)、縦軸は最小原子濃度 (N<sup>\*</sup>/N<sub>0</sub>)であり、各サンプル1~4毎にプロットした。詳しくは、定常状態になっ た原子濃度N<sup>\*</sup>の配線内での最小値を、仮定した入力電流密度に対してプロットした。図 5 (A)に示されるように、各サンプル1~4のプロットを結ぶ線と臨界の原子濃度(N 「灬」/ N 。 ) の線との交点から閾電流密度が評価される。図 5 ( B )はこのようにし て評価された各サンプル1~4についての閾電流密度 j th (MA)を示す。配線内の原 子濃度N^がN^┉ュっの値に達するとボイドができて損傷するモデルとなっているため 、定常になった時にちょうど配線内の原子濃度N\*の最小値がN\*㎜ューの値になる入力 電流密度を図5(A)に示されるグラフの交点から求め、それを閾電流密度 j thとして 評価する。

[0042]

図5(A)、(B)に示されるように、サンプル1と4の閾電流密度 j thはほとんど 同じである。これに対して、サンプル2では閾電流密度 jth はサンプル1および4の閾 電流密度 i モ ー より大きい。サンプル 3 では閾電流密度 i モ ー はサンプル 1 および 4 の閾 電流密度 j モ h より小さい。リザーバが陰極ビア側に配置されたサンプル 2 の場合、闘電 流密度 j thは他のサンプルより大きくなった。これは、定常状態におけるビア間通電部 の原子濃度分布はサンプル1と3とでは変化しないが、サンプル2の分布はそれらよりも 高い濃度となり配線内の原子濃度の最小値も増加したためと考えられる。つまり、サンプ ル2は他の形状のサンプルよりも多く電流を流すことができるため、EM損傷しにくい形 状であるということができる。

図6は、サンプル1、2および3の配線に沿った原子濃度N/N₀の分布を示すグラフ である。図6で横軸は配線中央部(図4参照)からの距離(µm。負が陰極側で正が陽極 側)、縦軸は原子濃度(N/N₀)であり、サンプル1は実線、サンプル2は破線、サン プル3はピッチの短い破線で示す。サンプルはすべて入力電流密度が等しい。式1によれ ば、電流密度が等しい場合、EMの駆動力は等しい。このため、定常状態では原子濃度の 傾きは互いに対応している。一方、リザーバでは電流密度はほとんどゼロであり、EMの 駆動力はない。従って、定常状態ではリザーバにおける傾きはほとんど水平となる。質量 の法則によれば、サンプル2における原子濃度分布はサンプル1における分布から広域的 に上方ヘシフトすることになる。

[0044]

図7は、本数値シミュレーション終了時の原子濃度分布を示すグラフである。図7で横 軸は配線中央部(図4参照)からの距離(μm。負が陰極側で正が陽極側)、縦軸は原子 濃度 N<sup>\*</sup>(1 / µ m<sup>3</sup>)、入力電流密度 j = 2 . 0 (MA / c m<sup>2</sup>) でありサンプル 3 に ついて示す。図7はN\*の分布であるため、各要素に複数のN\*がありそれらをプロット していることから、太い線にみえている。図7に示されるように、陰極側のビア部におい て濃度がN^咖啡に達し、ボイドが発生すると考えられた。この結果は実験におけるボ イド発生箇所(非特許文献17参照)に一致する。

【0045】

以上より、本発明の実施例1によれば、EM損傷支配パラメータを用いた本数値シミュ 30 レーションを実施することにより、集積回路配線におけるリザーバ効果の評価を行った。 本数値シミュレーションは、まず電流密度分布および温度分布を2次元FE分析(有限要 素法。一般的には数値解析でもよい。)により計算する。上記解析結果(電流密度分布お よび温度分布)とディスク38(後述)等に記録された薄膜特性(配線材料の物性定数。 非特許文献4参照)とから各要素における上記支配パラメータ(AFD<sup>\*</sup> 。 e ո լ e ո d 、AFD<sup>\*</sup>gen)を計算する。次に、 に関する原子濃度N<sup>\*</sup>を上記支配パラメータの 値に基づき計算する。各要素における原子濃度Nはすべての の値についてのN<sup>\*</sup>の平均 により計算する。臨界原子濃度または原子濃度が変化しなくなる定常状態に達したか否か を判断し、達したと判断した場合は終了し、そうでないと判断した場合は上記支配パラメ ータの計算を繰返す。本数値シミュレーションにより、陰極端側にリザーバを設けると、 40 配線内部の最小原子濃度が増加し、配線の許容電流密度が増加することがわかった。また 、リザーバを有する配線に許容値以上の電流が作用した場合、陰極側のビア部で原子濃度 はボイド発生の臨界値に到達するため、ボイド発生箇所は陰極側のビア部であると評価で きた。即ち、許容値以上の電流が作用した場合、陰極側のビア部にボイドが発生すること が実験事実と符合していることがわかったため、本数値シミュレーションによる結果は妥 当であると言える。つまり、従来あまり行われない陰極端側のみにリザーバを設けること を行うと、配線の許容電流密度が増加し、損傷しにくくなることがわかった。以上により 、リザーバ構造を有するビア接続の多層配線について、ボイドの発生に至るEM損傷過程 の本数値シミュレーションを実施し、リザーバ効果を考慮しつつ閾電流密度を評価するこ とにより配線の信頼性を評価するシミュレーション方法等を提供することができた。リザ 50

10

ーバ構造を有するビア接続の多層配線構造において、陰極端のビア側にのみリザーバを設 け、当該多層配線内部の最小原子濃度を増加させることにより、多層配線の許容電流密度 を増加させるビア接続の多層配線構造を提供することができた。

【実施例2】 [0046]

図8は、本発明のシミュレーションプログラムを実行するPC等のコンピュータの内部

回路30を示すブロック図である。図8に示されるように、CPU31、ROM32、R A M 3 3、画像制御部 3 6、コントローラ 3 7、入力制御部 4 0 および外部 I / F 部 4 2 はバス43に接続されている。図8において、上述の本発明のシミュレーションプログラ ムは、ROM32、ディスク38またはDVD若しくはCD-ROM39等の記録媒体( 脱着可能な記録媒体を含む)に記録されている。ディスク38等の記録媒体(記録部)に は、上述した表2で示される物性定数等の薄膜特性が記録されている。シミュレーション プログラムは、ROM32からバス43を介し、あるいはディスク38またはDVD若し くはCD-ROM39等の記録媒体からコントローラ37を経由してバス43を介しRA M33ヘロードされる。画像制御部36は、シミュレーションプログラムによる計算結果 のデータを V R A M 3 5 へ送出する。表示部 3 4 は V R A M 3 5 から送出された上記デー 夕等を表示する。VRAM35は表示部34の一画面分のデータ容量に相当する容量を有 している画像メモリである。入力操作部41はコンピュータに入力、指定等を行うための マウス、キーボード、タッチパネル、スイッチ等の入力装置であり、入力制御部40は入 力操作部 4 1 と接続され入力制御等を行う。外部 I / F 部 4 2 はコンピュータ(C P U ) 31の外部と接続する際のインタフェース機能を有している。

[0047]

上述のようにコンピュータ(CPU)31が本発明のシミュレーションプログラムを実 行することにより、本発明の目的を達成することができる。シミュレーションプログラム は上述のようにDVD若しくはCD-ROM39等の記録媒体の形態でコンピュータ(C PU)31に供給することができ、シミュレーションプログラムを記録したDVD若しく はCD-ROM39等の記録媒体も同様に本発明を構成することになる。シミュレーショ ンプログラムを記録した記録媒体としては上述された記録媒体の他に、例えばメモリ・カ ード、メモリ・スティック、光ディスク等を用いることができる。

【産業上の利用可能性】

[0048]

本発明の活用例として、ビア接続を有する多層配線(特に集積回路配線)における許容 電流密度の向上(増加)に適用することができる。

【符号の説明】

【0049】

金属配線、 12 金属結晶粒、 30 コンピュータの内部回路、 3 1 1 0 С 33 RAM、34 表示部、 35 VRAM、 ΡU、 32 ROM, 36 画 37 コントローラ、 38 ディスク、 39 DVD若しくはCD-R 像制御部、 40 入力制御部、 41 入力操作部、 42 外部I/F部、 43 バス ΟМ、 51、52、53 金属配線、 54n、54P 配線端部、 50 多層配線、 55n、55p 張り出し部(リザーバ)、 56 ビア接続。

【先行技術文献】

【非特許文献】

[0050]

【非特許文献 1】Fu, C. M. et al., Width Dependence of The Effectiveness of Reser voirLength in Improving Electromigration for Cu/Low k Interconnects, Microelectro nics Reliability, Vol.50, No.9 11, (2010), pp.1332 1335.

【非特許文献 2】e.g. Hau Riege, C.S., MicroelectronicsReliability, Vol.44 (2004) , pp.195 205.

【非特許文献 3】Abe, H., Sasagawa, K. and Saka, M., InternationalJournal of Frac

50

40

10

20

ture, Vol.138 (2006), pp.219 240.

【非特許文献4】Sasagawa, K. et al., Evaluation of Threshold Current Density of Electromigration Damage in Interconnect Tree with Angled Cu Lines, Proc. 12thInt . Conf. on Electronics Materials and Packaging, (2010), pp.110 116.

【非特許文献 5】Hieu, N. V. et al., Effect of Current Crowding on Electromigrati on Lifetime Investigated by Simulation and Experiment, Computational Materials S cience, Vol.49 (2010), pp. S235 S238.

【非特許文献 6 】Tan, C. M. et al., Applications of Finite Element Methods for Re liability Study of ULSI Interconnections, Microelectronics Reliability, in Pres s.

【非特許文献7】Sasagawa, K. et al., Governing Parameter for Electromigration D amage in the Polycrystalline Line with a Passivation Layer, Journal of Applied Ph ysics, Vol.91, (2002), pp.1882 1890.

【非特許文献 8】Lin, M. H., Chang, K. P., Su, K. C. and Wang, T.Microelectronics Reliability, Vol.47, (2007), pp.2100 2108.

【非特許文献 9】Hu, C. K., R. Rosenberg, and K. Y. Lee, Applied Physics Letters , Vol.74, Iss.20 (1999), pp.2945 2947.

【非特許文献10】Sasagawa, K., Hasegawa, M., Saka, M. and Abe,H., Journal of Ap plied Physics, Vol.91, (2002), pp.1882 1890.

【非特許文献 1 1】Hasegawa, M,. Sasagawa, K., Saka, M. and Abe,H., Proc. of IPAC K'03 (CD ROM), ASME (2003), IPACK2003 35064.

【非特許文献12】Choi, Z. S., Ronig, R. and Thompson, C. V., Journal of Applied Physics, Vol. 102(2007), 083509.

【非特許文献13】Hu, C. K., Gignac, L. and Rosenberg, R.,Microelectronics Relia bility, Vol. 46, (2006), pp.213 231.

【非特許文献14】Gan, C. L., Thompson, C. V., Pey, K. L., and Choi, W. K., Jour nal of Applied Physics, Vol. 94, (2003), pp.1222 1228.

【非特許文献 1 5】Figliola, R. S., Beasley, D. E., Theory and Design for Mechani cal Measurements, Second ed. New York: John Wiley & Sons, Inc.,(1995).

【非特許文献16】Sasagawa, K., Hasegawa, M., Yoshida, N., Saka,M. and Abe, H., Proc. of InterPACK '03 (CD ROM), ASME, 2003, IPACK2003 35065.

【非特許文献 1 7】Vairagar, A. V. et al., Reservoir Effect on Electromigration M echanisms in Dual damascene Cu Interconnect Structures, Microelectronic Engineer ing,Vol.82, (2005), pp.675 679.

10







 $[ \square 1 ]$  (A) (B) (B) (B) (B) (B) (B) (B) (B) (C) (C)





(B)

(A) 
$$j = 52 + W + j$$
  
 $51 \sim 52 + 53$ 

52

 $\mathbf{W} + j$ 

Sample 1

Sample 2 (Reservoir is located on the cathode end)

$$55n - 52 + j$$

$$55n - 55n - 76$$

$$55n - 76$$

$$55n - 76$$

$$51 - 52$$

$$52$$

Sample 3 (Reservoir is located on the anode end) -52









	Threshold current density $j_{th}$ [MA]				
(B)	Sample 1	0.7701		Sample 3 0.6731	0.6731
	Sample 2	0.8813		Sample 4	0.7565



<u>50</u>





【図6】





フロントページの続き

 (56)参考文献
 特開平11-243146(JP,A)

 特開2003-347300(JP,A)

 特開平11-186433(JP,A)

 特開2005-286202(JP,A)

 特開2008-028416(JP,A)

 特開2008-028416(JP,A)

 特開2008-028416(JP,A)

 特開2008-306969(JP,A)

 特開2001-351919(JP,A)

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)
 G 0 6 F 1 7 / 5 0
 H 0 1 L 2 1 / 8 2
 I E E E X p l o r e
 C i N i i
 J S T P l u s (J D r e am I I I )